

関西大学文学部・文学研究科  
関西大学文化交渉学教育研究拠点  
渋沢栄一記念財団寄附講座「日中関係と東アジア」第三輯

# 東アジアの 言語・文化・芸術



内田 慶市・中谷 伸生 編

関西大学文学部  
関西大学大学院文学研究科

## 近代における日中語彙交流について

関西大学外国語学部教授 沈 国 威

こんにちは。ご紹介にあずかりました沈と申します。私の姓の「沈」という漢字は名字専用で「シン」と発音します。

さて、今日は近代における日本と中国の語彙交流についてお話をしたいと思います。

昨年あたりから中国人旅行者がたくさん日本にやってくるようになりました。彼らに「日本の印象は？」と聞きますと、大体2つの答えが返ってきます。1つはとても清潔だ、もう1つはあまり外国に来た感じがしないというものです。

なぜ外国に来た感じがしないのかと聞きますと、町中の看板や標識にたくさん漢字が使われているからだということです。これは明治初期はじめて日本にやってきた中国の外交官や文化人と同じ感想です。現在、漢字の形は完全に中国と同じではないけれども、香港、台湾に行っても中国本土と違う漢字を目にしますから、日本の漢字にだけ違和感を覚えることはないようです。このように、日本も中国も漢字を使っているのですが、このような国と地域を、私たちは「漢字文化圏」とネーミングしています。

「漢字文化圏」には、中国、日本の他に朝鮮半島、マレーシア、シンガポール、そして台湾、香港が含まれています。一部の学者からは、文化はそれぞれの言語・民族にあるものなので、「漢字使用圏」という名称が事実に近いので改めるべきという提案が出されていますが、しかし、漢字が孤立に存在するのではなく、先哲の言動や思想、古代人の社会生活を記録する記号として用いられているのです。つまり漢字は中国語そのものだけ

ではなく、中国の文化をも記録しており、漢字とそれを用いる数多くの漢籍を切り離すことはできません。そして東アジアの国と地域は、漢字を媒体にし、漢籍を共有しています。共通の古典はまた共通の文化的素地を作り上げています。従って、私は、「漢字文化圏」という名称を使い続けようと思います。

現在、ベトナムでは漢字の使用をやめましたし、韓国でもかなり数を減らしているとはいうものの、使っている語彙の6割が漢字の発音を持っています。つまり、漢字が使われていなくても、漢字の発音が残っているということです。このように漢字文化圏では、歴史上、或いは現在それぞれの言語を記録する記号として、漢字を使用しているのです。漢字を使う漢字文化圏の各言語において、同形語が数多く存在しています。いわゆる同形語は、同じ漢字を使っている言葉のことです。こういった言葉は、例えば中国語と日本語の間で、一体どれくらいあるのかという問題に入る前に、まず漢字の字体について少し補足しておきます。

ご承知のように、漢字は早くも紀元前から中国の周辺地域に広がり始めました。20世紀半ばまで、漢字の字体は中国のあの有名な辞書『康熙字典』に準拠していました。ここにいわゆる正統意識があったからです。勿論、江戸時代に国字と称して日本で作られた俗字はたくさんありましたが、文章を書くとなると、やはり『康熙字典』という中国の辞書に準拠するのが基本でした。しかし、19世紀後半から20世紀初頭にかけて、それぞれの国と地域で自然な状態で使われていた言葉が、それぞれ国家の言葉、つまり「国語」となりました。それに伴い、字形もそれぞれの国で決めていくことになりました。現在、漢字文化圏で使用されている漢字は4種類あります。

まずは、台湾や香港、マカオで使われている繁体字です。日本の旧字体もこれに相当します。次は、韓国の字体です。さらには日本の新字体です。日本の新字体は、当用漢字表によって決定され、1948年頃から使われ始めた字体です。最後は、中国本土で使用されている簡体字です。簡体字は現

在シンガポールとマレーシアでも使われています。『康熙字典』の字形をオリジナルとすると、中国の簡体字は変化が一番大きいこととなりますが、ルーツは同じですので、取りあえず、同形としておきます。

では、日本語と中国語の間にどれくらいの同形語が存在しているのでしょうか。まず次の表を見てください。

HSK	同形語/ 二字語総数	同形語/ 三字語総数	同形語/ 四字語総数	同形語/ 複合語総数	%
甲級詞	320/ 546	4/ 13	0/ 2	324/ 561	57.8
乙級詞	878/1359	23/ 66	1/ 5	902/1430	63.1
丙級詞	939/1641	17/ 76	7/ 33	963/1750	55.0
丁級詞	1515/2837	58/115	17/145	1590/3097	51.3
合計	3653/6383	102/270	25/185	3778/6838	55.0

この表は、外国人に対する中国語教育で必要とされる語彙リストであり、外国人は6,800語前後の複合語を習得すべしとなっています。この6,800語のうち、日中同形語は55%、つまり2語に1語以上の割合で同形語が存在しているのです。語の意味としては同じものもあれば、かなり違うものや微妙に違うものもあります。具体的に見ていきますと、「甲級」という最も基本的な語彙の中では同形語は57%であり、次の「乙級」では63%に達しています。乙級の語は、日常語彙というより、学校教育や書物に用いる言葉が中心で、その6割が日本語の言葉と同形ということになっています。

次に同形語の意味上の特徴について見てみましょう。同形語には、漢籍、つまり中国の古典にすでに存在している語や16世紀以降西洋の宣教師が中国に来てから作られた語、そして江戸時代中期以降、日本で作られた漢字語が含まれています。特に日本でできた漢字語は和製漢語と呼ばれています。日本の国語研究ではこれらの漢字を使う言葉を「新漢語」と呼んでいます。新漢語は、西洋から伝わった新しい概念を表すために作られたものです。したがって日常語彙というより、新漢語は今日では抽象語彙、知的語彙、学術用語に属するものが非常に大きな比重を占めています。

それでは、日中の言葉になぜ同形語がかくもたくさん存在しているのかという問題を考えてみましょう。3つの可能性があると思いますが、まず1つ目は日本と中国で別々に作られたということです。同じく漢字を使っているし、新語を作り出す方法が似ている部分もあるので、別々に作られたというのは不可能ではないでしょう。しかし、別々に作られたとするには数が多すぎます。何千もの語が偶然、両言語で別々に作られたというのはちょっと考えにくいということです。そうすると2つ目として、中国で作られ、日本に伝わって来たということ、そして3つ目として日本で作られ、中国に伝わって行ったということになります。新漢語の多くは、中国か日本で作られ、その後、相手の言語に伝わった事実がこれまでの研究で明らかになりました。

私の研究は、新漢語が如何に作られ、またどのようなプロセスを経てそれぞれの言語に伝わり、定着したかということです。作る、つまり創出には中国と日本が関わり、造られた新語は、言語接触と語彙交流によって漢字文化圏、中国、日本の他に朝鮮半島、ベトナムに広がり、定着しました。私はこの現象を「共創、共有」、つまり一緒に作り、分け合うと呼んでいます。新語の創造に朝鮮半島の知識人は実際関わったことは多くありません。これは距離的に中国と非常に近いため、正統意識が束縛が強すぎた、というのが原因ではないかと私は考えています。それに対して日本は中国とほどほどの距離があり、必要に応じて独自の判断で新語を創ったのです。また、西洋文明を受け入れる時期というのも原因の1つかと思います。中国は16世紀末、日本は江戸中期、つまり18世紀半ばから西洋文明を取り入れはじめましたが、朝鮮半島では19世紀後半以降でした。

そこで、今日は、創造——つまり漢字による新語、訳語が中国と日本でどのように作られたのか、共有——つまり作られた言葉が中国と日本、そして漢字文化圏でどのように移動し、共通の言語資源になったのかという2点についてお話ししたいと思います。

さきほども申し上げましたが、新漢語の発生は、西洋の新しい概念がア

ジアに到来したことと関係があります。西洋の学問は当時「西学」と呼ばれ、中国、日本の歴史学界では、このような知識の移動を「西学東漸」と呼びます。西洋の学問が東アジアにやって来るということです。つまり15世紀以降の大航海時代において、知識が世界中を駆け巡り、書物の形による知識の移動が、新漢語を作り出したのです。



「西学東漸」という歴史的事件において、カトリックの布教組織「イエズス会」が大きな役割を果たしました。イエズス会の宣教師をイエズス会士と呼びますが、最初は日本にやって来ましたが、日本での布教は成功が見込めないと考え、中国にターゲットを定め直しました。イエズス会の有名な宣教師であるマテオ・リッチらが中国でとった政策は、適応政策と言われています。これはまず中国の文化に適応して、それから布教をしようというものです。写真からも分かるように、マテオ・リッチの服装は中国の儒学者の服装です。このように現地の知識人と区別がつかない格好、言葉遣いで布教しようというのが適応政策です。また、中国のような長い歴史と豊富な古典のある国では、いきなり宗教の話をするのではなく、自分の知識水準の高さを示さないと、中国の知識人は相手にしてくれないということを悟り、盛んに翻訳活動を始めました。何を翻訳したかという、世界地理、西洋事情、天文学、数学などで、こういった翻訳書を「漢訳洋書」と呼んでいます。しかし、マテオ・リッチらの布教から100年前後経ちますと、中国は厳しい禁教政策を実施しました。日本の鎖国と違い、宣教師たちを追放はしますが、布教活動をしないという条件付きで、一部はお雇い外国人として北京に残りました。したがって著述活動を続けることができたのです。それでは、彼らの言葉作り、新しい言葉の創作を見て

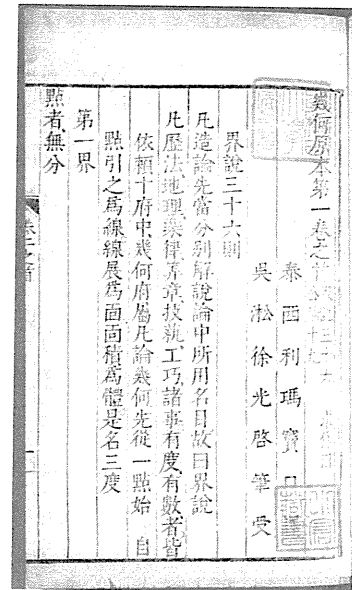
いきましよう。

マテオ・リッチはすでに1583年に中国の広東省に入りましたが、1601年になってようやく念願の北京入りを果たしました。リッチは1608年に著名な知識人である徐光啓の協力を得て、『幾何原本』という幾何学の本を翻訳、出版しました。西洋の書物を翻訳するとなれば、まず言葉、特に術語の問題に直面します。『幾何原本』の巻首に、「界説三十六則」という部分が出てきます。いわゆる「界説」は定義のことです。まず書物に用いられている言葉を厳密に定義しておくというのが西洋流の自然科学のやり方で、例えば「直線」とは何か、「点」とは何かということです。こういったやり方は、後々日本の蘭学翻訳にも影響を与えています。

イエズス会士たちが、自由な環境で書物を翻訳、出版できたのは100年足らずですが、この間に様々な言葉が作られました。宗教関係では、「天主」、「基督」、「使徒」、数学関係では「幾何」、「三面」、「線」、地理学関係では「地球」、「熱帯」、「温帯」、「寒帯」、機械学では「滑車」、「重心」、「運動」、医学では「骨髓」、「視力」、「角膜」等々です。

これらの言葉は、新しく作ったものもあれば、漢籍の言葉の意味を再定義して使うというケースもあります。

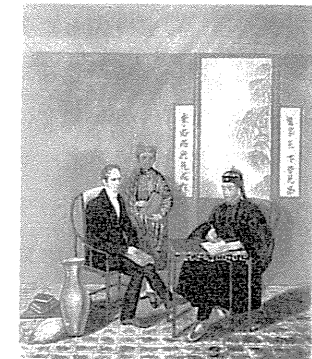
中国は18世紀に入ってから厳しい禁教政策が実施されるようになり、布教をしないという条件で、極少数の人が清王朝の天文台や宮中に残りましたが、イエズス会士の多くがマカオや国外に追放されました。彼らによる翻訳活動も当然衰退の一途を辿りました。ところが19世紀に入ると、新教（プロテスタント）の宣教師がはじめて中国の広東にやってきます。最初



に広州に上陸したのがロンドン伝道会宣教師のモリソンで、1807年のことでした。モリソンには中国での布教環境を整えておくという任務があり、彼は1815年から8年の歳月を費やして何千頁という『英華字典』を作りました。『英華字典』は中国には残っていませんが、日本各地の図書館に多数所蔵されています。

1840年のアヘン戦争前、中国はまだ禁教政策のもとにあったので、宣教師たちは書物による文書伝道と医療伝道を行うのが精一杯でした。当時の彼らのスローガンは、“Waiting for China”（中国の開門を待つ）というもので、中国が開国するまで東南アジアで待機し、そこで様々な書物を出版し、密かに中国に持ち込んで広めておきました。実際に、彼らの思惑通りアヘン戦争で敗北した中国は、

1844年以降沿海部の5つの都市を開港しました。イギリスに割譲された香港、そして広州では、翻訳、出版活動が自由になりましたが、1850年代に入ると布教の中心が上海に移動します。上海はその地理的位置によって商業の中心となり、宗教的にも中国全土に対して発信できるので、広州・香港の宣教師らは大挙して北上します。広州・香港での布教活動の対象が庶民だけであったのに対して、上海では中国の知識人層もその対象となります。ロンドン伝道会は上海に「墨海書館」という布教所兼印刷工場を設置しました。最初の数年間は中国語の聖書を印刷しました



が、その後、一般書や雑誌が多く出版され、日本にもたくさん持ち込まれました。日本が鎖国をやめ、書物の輸入が自由になったのは1859年のことでした。中国では1862年に、同文館という政府主導の外国語教育機関が設置され、書物の翻訳も行われました。日本にも大きな影響を与えた『万国公法』などの法律関係の書物が北京で翻訳されたのです。

モリソン、そして墨海書館の創設者メドハーストの絵からも分かるように実際の翻訳作業は西洋人が口述し、それを中国人が筆録するというイエズス会士以来の伝統的なやり方で行われましたが、上海では中国のトップクラスの知識人の協力を得ることができたのが広州時代と大きく異なる点と言えます。中国知識人の協力によって、翻訳の質が向上しましたし、イエズス会士らの翻訳書の遺産も活用されました。

新教の宣教師たちが作った言葉にはどのようなものがあるかと言いますと、数学では「指数」、「関数」、地理学では「半島」や外国の国名地名、機械学では「引力」、「螺旋」、「重点」、医学では「～～炎」、その他には「銀行」、「陪審」、「保険」等々あります。しかし彼らが作った言葉を見ると、人文科学用語が非常に少ないことが分かります。これが後に日本製の訳語が中国に入っていく余地を残したということになります。

一方、日本ではどうだったのでしょうか。

漢字は紀元前、漢の時代に日本に伝わってきたとされています。聖徳太子の時代、つまり6世紀後半、すでに漢文の良し悪しが分かる記録が残っています。これはつまり漢字、漢文の知識はもう身につけたと言うことになります。しかし、日本人はいつの時代から漢字で新しい言葉を作り始めたのかというとなかなか難しい問題です。なぜなら漢字はよその国の文字で、正しく使いこなすことが非常に難しく、何かの拍子で誤用が生じたりします。奈良時代からすでに中国の典籍にない言葉が日本の書物に登場しますが、これらの言葉は、意識的に作られたものではなく、いずれも誤用によるものだと考えられています。日本語研究ではこのようなものを「変体漢字」や「変体漢語」、「変用」と呼んでいます。

私は、意識的に新語を作り始めたのは、江戸中期からだと考えています。1774年の『解体新書』の翻訳出版は象徴的な出来事といえます。なぜ新しい言葉を作らなければいけなくなったかという、答えは明快です。漢籍にない西洋の新概念を受け入れるためです。では、なぜ大和言葉ではなく、漢字で新語を作るのかというと、漢文が東アジアにおける唯一の学術言語であり、書記言語であったからです。漢文、或いは漢文調の文章は19世紀末、20世紀初頭まで、学術言語の座に座り続けていました。

有名な話を1つ紹介しましょう。日露戦争の時、日本の外務省が中国の外務省に対し、「今後、外交文書は、これまでの漢文でなく、和文で送付する」と通知しました。中国の外務省は東京駐在の中国大使館に真相を探るように指示しました。というのは外交文書の使用言語はただ言葉の問題ではなく、国家間の力関係をも反映しているからです。大使館が、日本の外務省に問い合わせたところ、実は漢文で送りたいのだが、漢文が書ける人が少なくなり、対応できなくなったので、和文で送ることにしたのだという素っ気ない返事が返ってきました。このように漢文や漢文調の文章が流行らなくなったのは、20世紀10年代以降です。つまり明治時代が終わるころです。

では、どのような方法で新しい漢字語を作ったのかを『解体新書』を例に見ていきたいと思えます。『解体新書』の中心人物は杉田玄白でして、彼は訳語創造に3つの方法があると述べています。彼の言葉を使うと、第1は、「翻訳」、つまり漢籍の言葉を用いて訳出するということです。第2は、「義訳」です。これは漢籍に適当な言葉が見つからない場合、やむなく自分で訳語を考案するということです。この「義訳」には、実は具体的に2つの方法が用いられました。1つは逐字訳で、つまり外国語を1つ1つの成分に分解して、それぞれ漢字を当てはめるという方法です。杉田玄白は「軟骨」という例を挙げましたが、その他に「十二指腸、盲腸」なども有名な例です。もう1つは意識です。元となる外国語の言葉が分解不可能な場合、全体的に意味を汲み取り、訳語を考え出す方法です。「神経」

が典型的な例です。第3は「直訳」ですが、これは現在の「直訳」の意味と違い、音訳のことです。元の言葉の意味が分からないからといってごまかすのではなく、その発音を直に写しておこうということです。

杉田玄白は『解体新書』に色々と不備があったと考え、出版後すぐ改訂作業に入りました。改訂作業は1796年に一応終了しましたが、『重訂解体新書』として出版されたのは30年後の1826年です。改訂作業をやり遂げたのが大槻玄沢です。彼はもともと東北地方の小さな町の医者で、師の命令で東京に行き、杉田玄白の門弟になりました。大槻玄沢は江戸時代を代表する蘭学者で、医学の知識も非常に豊富でした。彼は訳語の作成について次のようなことを述べています。

西洋の医学書には中国や日本で古くから言及されていない概念が多に多い。また、譬え言及されており、概念として存在したものでも、形や機能面において東西の医学の間に大きく食い違ったものが少なくない。例えば中国では昔から、手足や腸、心臓、肝臓などの概念を表す言葉がありましたが、西洋医学のように厳密に定義された術語は必ずしも存在しません。従って、新しく用語を決めなければいけません。この新しい用語を決めることに大槻は「私立」という言葉を使いました。この「私立」は「私造」と同じ意味で、非常に注目すべき言葉だと思います。正々堂々、自信満々と新たに立てるのではなく、正当性を欠く「勝手に作った」というのがこの言葉の意味です。つまり中国の典籍に適切な語があればその語を最優先に使うが、それが見つからない場合、非常に恐れ多いことではあるが自分で作りますと宣言しているのです。蘭学者は「神経」といったような新しい言葉の他に「腺」、「腓」という新しい漢字も造りましたが、これは彼らにとってもっとも恐れ多いことのように、実際の「新製字」は、そう多くありません。要するに、蘭学者たちは、造語、造字に対する恐縮の念を最後まで引きずっていたようです。

大槻玄沢はまた外国書の翻訳をめぐる中国と日本の違いにも触れています。中国は、西洋人を中国に招き（実は招いたのではなく、勝手に押しか

けたのだが）、西洋人が口述したものを中国人が筆録しているが、それに対して日本は、直接外国の書と対峙し、様々な困難に打ち勝って訳出していく。中国の場合は一種の重訳になるが、日本は直に外国語を自分の言葉に置き換える真の翻訳である、中国のやり方では中国人は外国語が分からないので、隔靴搔痒の感が免れないと大槻は指摘しています。

蘭学の訳語の成果を見てみますと、医学、特に眼科・解剖学の用語はほとんど蘭学者たちの手によって作られました。そのほか、植物学、化学、兵学、言語学の用語もかなり整備しました。幕末を経て明治時代に入ると、啓蒙家たちが蘭学者の造語法を継承しました。蘭学者と明治の啓蒙家二代の努力によって、現代日本語の語彙体系、今日私たちが使っている日本語の言葉は、だいたい明治20年代までに完成したと考えられます。これは『言海』という国語辞書の出版や数多くの術語集の出版によって一応証明されています。

では、PPTで明治期の言葉の創造者たちを見てみましょう。

左から西周、福沢諭吉、津田真道、加藤弘之です。西周は有名な学者で、「哲学」という言葉を作りました。この人はたくさんの書物を翻訳し、2,000前後の訳語を作りましたが、そのうち1割強が残りました。

福沢諭吉は、「演説」という言葉を作ったと言われています。この人が実際に作った言葉は案外少ないのですが、新しい言葉を自分の書物に使用してそれらを普及させるという非常に大きな役割を果たしました。「文化」、「文明」、「野蛮」といった言葉は、福沢諭吉によって広まったのです。

津田真道は、西周の同級生で、「哲学」という言葉は二人の相談によってできたという記録が残っています。「金券」というのは津田が作った言葉で、「経済」は彼が使ったことにより広がったということです。

加藤弘之は、東京大学の総長を務めた人です。彼が作った「進化」は余りにも有名な言葉です。

以上が中国で作った言葉と日本で作った言葉の紹介です。

続いて、言葉の交流時期とその媒体である書物について見ていきます。

まず、中国から日本というルートですが、第1波は17世紀～18世紀です。書物には2種類あり、古典・仏典・善書（善人、善官になるための書物）類と数学・天文学・地理・博物学などの前期漢訳洋書類です。

第2波は1859年～1890年で、これは日本の開国に始まり、もう中国の本なんて見る必要はないという時代になるまでということです。書物は後期漢訳洋書（数学・天文学・地理・博物学・医学・化学）と英華字典・新聞・雑誌類です。また重要なこととして、幕末・明治初期は漢学崇拜時代で、蘭学者が訳した言葉を中国で作られた言葉に置き換えるということが起こりました。「解体」を「解剖」に、「舎密」を「化学」に、「健全」を「衛生」にというように、中国の言葉、中国の訳を使おうという訳語の交替が見られました。

次は日本から中国というルートです。19世紀半ばまで、日本の書物が中国で読まれたことは殆どありませんでした。しかし明治期に入ると中国で活躍したアメリカの宣教師が、帰国する途中に日本に立ち寄った際、日本の書物や新しい言葉に触れ、また、中国の商人、外交官、文人らも日本に来るようになり、その紀行文や書物に日本の新語、訳語が登場しています。しかし大規模な語彙交流はやはり1895年、日清戦争の終結を待たなければなりません。日本のメディアの中国進出と日本の漢学者たちも重要な役割を果たしています。漢学者というと、今日の私たちからすれば古めかしいイメージがありますが、当時の漢学者は西洋文明を中国に伝えようとの使命感に燃えていました。例えば、最初の中国文学史を書いた古城貞吉は2年近く上海で『時務報』の翻訳に携わり、後に台北帝国大学の教授になった藤田豊八は実証史学の理念を王国維らに教えました。王国維は後に有名な学者になりました。その他には岡本監輔、岡千仞、内藤湖南といった漢学者が中国で活躍しました。

20世紀に入ると中国人の日本留学ブームが起こり、たくさんの日本書が中国語に翻訳されていきます。20世紀に入った最初の10年間は、主に日本

の書物を通じて新しい知識を取り入れようということで、数々の翻訳が行われた時期で、歴史学ではこの時期（1900年～1910年前後）を中国と日本の黄金の10年と呼んでいます。「西洋の学問は東洋からやってくる」という言葉があります。直接西洋の書物を読める中国人が少なく、日本の書物は漢文と漢文調で、たくさんの漢字語が使用されており、中国の学習者、翻訳者にとって、とっつきやすいということで、西洋の学問が日本の書物によって伝わってきました。

さらにもう一つおもしろいルートがあります。「中国→日本→中国」というもので、これには2パターンあり、1つは、中国の古典語が日本で訳語として採用され、その後再び中国に環流（戻っていくこと）していきまます。「共和」、「革命」、「経済」、「関係」、「影響」、「印象」などはこのパターンです。

もう1つのパターンは、中国で作られましたが、一般化、つまり普及しませんでした。先ほど述べた中国から日本というルートの第1波、第2波で入ってきて、日本で普通に使われ、中国に戻っていくというものです。「細胞」、「望遠鏡」、「熱帯」、「鉛筆」といった言葉がそうです。「鉛筆」は中国の古い時代にありましたが、1860年代には一部の人しか使いませんでした。これが日本に伝わり、その後工業生産された「鉛筆」と一緒に中国に入ってきます。当時の中国人は鉛筆の前に「三菱」という2文字も見ていたわけです。以上が「中国→日本→中国」という双方が貢献した例です。

さて、16世紀、17世紀、18世紀に中国、日本、或いは東アジア、あるいは漢字文化圏では、力を合わせて西洋の新しい知識、新しい概念を取り入れ、その取り入れに成功したと言えます。では、これからどうなるのかという話を最後にしたいと思います。

今日、たくさんの新しい概念がアジアにやっけてきており、その新しい概念に私たちはどのように対処していくのかということが問題となります。

日本はこれまで以上に片仮名、つまり音訳の形で外国の新概念を取り入れていくのでしょうか。どうも行き詰まるような気配があります。国立国

語研究所では言い換えの研究をしています。片仮名の音訳語ではなかなか意味が分からないので、簡単で、分かりやすい言葉に変えましょうという研究です。この言い換えの言葉は漢字の言葉が多いのです。なぜ漢字の言葉を使うかという研究もしなければいけません、漢字という共通のものがあり、漢字を使うことにより、アジアで同形語が形成されていきます。こういった言葉の形成が、東アジアでの新しい概念の共有につながっていくわけです。

日本では、先日、「新常用漢字表」が公表されました。200字近い漢字を増やしたわけですが、これにより中国語との間に新語創造における共通の基盤が維持されるというか、もっと強化されることになると思います。また日本の文化的発信が近年また非常に強くなっています。中国で昨今、もっとも盛んに使われている言葉の1つに「拡大内需」があります。日本では30年前から使われていた言葉です（語順が逆ですが）。このように日本の新しい概念、あるいは新しい言葉が、今日でも中国に伝わっていく可能性が大いに存在しているのです。良い言葉もあれば、悪い言葉もあります。例えば、「干物女」（20代後半～30代の恋愛を放棄し、様々な事を面倒くさがり、適当に済ませてしまう女性を指す）という言葉も中国に伝わっています。

今後、日中両国でこういった概念の往来、言葉の交流、共有が19世紀、20世紀同様に盛んに行われるとはちょっと考えにくいですが、それなりの規模でこれからも続いていこうと考えています。

それでは、時間になりましたので、このあたりで終わらせていただきます。ご静聴、どうもありがとうございました。

(第11回 平成22年12月16日)

関西大学文学部  
関西大学大学院文学研究科  
関西大学文化交渉学教育研究拠点  
渋沢栄一記念財団寄附講座「日中関係と東アジア」第三輯

### 東アジアの言語・文化・芸術

平成23年9月30日 発行

編著者 内田 慶市・中谷 伸生  
発行所 関西大学文学部  
〒564-8680 大阪府吹田市山手町3-3-35  
電話 06(6368)1121  
印刷所 (株)N P C コーポレーション  
〒530-0043 大阪市北区天満1-9-19  
電話 06(6351)7271

© 2011 UCHIDA Keiichi, NAKATANI Nobuo

Printed in Japan

落丁・乱丁はお取替えます